

巻頭言

一般社団法人 協同総合研究所 第4期(2019年度～2020年度) の理事長就任にあたり

古村 伸宏 (協同総合研究所理事長/日本労協連理事長)

97回目となった「国際協同組合デー」。今年の世界共通テーマは「COOPS FOR DECENT WORK」。「協同組合は働きがいのある人間らしい仕事(ディーセント・ワーク)を実現します」という日本語表記である。「ディーセント・ワーク」という言葉は、2002年のILOにおける「協同組合促進勧告」の議論の中で頻繁に耳にした。元労協連理事長の菅野正純さんは、ジュネーブでの上記勧告の議論に直接参加する中で、「ディーセント・ワーク」を「尊厳ある労働」と訳し我々にその意味を紹介してくれた。「ディーセント」という言葉は、なかなか日本語になりづらいという。しかし、働くことをめぐって頻繁に「ディーセント」という言葉が語られる中で、協同組合に向けての「ディーセント・ワーク」への期待は何を意味するのか。その問いを探る中で行き当たったのが、本誌NO.121号に記された、協同組合促進勧告2002についての菅野元理事長の解説だ。(「大量失業の克服と労働の人間の再生(ディーセント・ワーク)に向かって—

(2002)」の核心—)

彼は勧告の核心を、①ディーセント・ワーク、②社会的経済セクター、③主体形成(エンパワーメント)と自立支援、④労働組合と協同組合の再合流、の4つにまとめている。協同組合を積極的に促進する意味を、世界はすでに15年以上前に呼びかけており、その核心はまさに今、我々協同組合運動及び協同労働運動が具体的に格闘しはじめているテーマではあるが、これらにまとまりを持たせ、関連づけて見て行くことが重要ではないだろうか。例えば本研究所も実践にコミットしながら「社会的連帯経済」を今年度の中心テーマの一つにおいているが、それが「ディーセント・ワーク」や「自立支援」との関連性を持たせて行くことは、自立支援の様々な制度が直面している「事業評価」に大きな影響を与えるだろう。時代はもはや、個別対策では本質に辿り着けないほど複雑に絡み合っている。いや、そもそも命の世界は複雑に関連し合い生態系を成り立たせてきた。これを個別化してきたのは人間の都合と思考によるものだ。

故あってこの度、本研究所の理事長の任を負うこととなった。労協連の理事長の任を兼務するという重責であり、生来「研究」とは最も距離がある身だとは承知しつつ、しかしこの任を負う意味を前向きに捉えた。それは、労働者協同組合法の実現から社会化へのこれから10年の中で、労協連に関連する全ての組織が、そのアイデンティティを再構築する時期となる。その中において「協同総合研究所」の「総合」に込められた意味を、研究活動と研究所の取り組みを通して体現すること、そしてその結果、協同総研が多様な人々と多様なテーマを呼び込みながら、一つのまとまりを持った、オルタナティブではない、新しい社会と世界

の展望を煌々と照らす存在へと高まっていかなければならない。そのために、閉ざされた固有の知から、開かれた万有の知を連鎖し創造する研究所を探求したい。研究者と実践者の協同を超えて、理性・知性・感性のプラットフォームとしての協同総研。そしてそれは単なるプラットフォームではなく、挑戦的で冒険的な研究所という体質を築いて行くことになるだろう。果たしてこれが、協同労働運動の中で生まれた研究所の「ディーセント」なあり方なのか？少し常識や固定観念を脱いで、協同総研の「ディーセント」を、創造的に追求していきたい。そのためには「雑」なる存在が不可欠である。これが我が任を負う理由である。